

連載 31 没後 50 年田坂具隆『五人の斥候兵』

田坂具隆^{ともたか}（1902 - 1974）は、没後 50 年ということで、国立映画アーカイブで特集が組まれている。旧制第三高等学校（現・京都大学）を中退後、転職して 1924 年に日活入社。『真実一路』（1938 年）、『路傍の石』（1938 年）、日中戦争時には『五人の斥候兵』（1938 年）、『土と兵隊』（1939 年）、戦後、『女中っ子』（1955 年）、『陽のあたる坂道』（1958 年）などを残した。召集され広島で被曝しており、戦後は長く原爆症に苦しんだという。

田坂は戦時下に国策映画、戦争映画に加担したということで、再評価が進まなかった監督である。

だが、『五人の斥候兵』は、戦争映画ではあるものの、敵愾心を煽るとか、聖戦言説のプロパガンダとかいう色合いがほとんどない、映画として出来上がった映画である。つまり、カメラワークや編集に意を尽くし、映画として見せ、映画として語らせる、国策協力のための歪みというものが極力避けられた映画なのである。

「この当時各新聞に報道された、北支戦線に於ける或る部隊の斥候兵の一人が、敵状偵察中敵の包囲に遭って他の斥候兵と別れ／＼になり、二日間敵陣地中をさまよった末、既に戦死と思はれたところへ、ヒョッコリ帰って来た、と云ふニュースを、この映画中の最高のエピソードとした」（『五人の斥候兵』に就いて）『キネマ旬報』1938 年 1 月 11 日号）と、脚色の荒牧芳郎



『五人の斥候兵』（1938 年）

は述べている。

水町青磁は「日本映画批評」（『キネマ旬報』1938 年 1 月 11 日号）で、「誇張と創造とを錯覚しない」「弾丸の音で昂奮することが愛国心だとのみ信じかねる作家としての沈着さがある」「逆説的に云へば、これは決して「軍事映画」と呼べるべきものではないのである」と、時節柄、慎重にことばを選んで賛辞を送っている。さらにこの映画の美質を掘り下げた水町は、「それにしても斥候兵が敵を突きさしたりすることがどうしても必要だったとしたら、まだ「映画芸術」には研究さるべき余地は充分ある。この場合敵と渡り合ふカットが無くとも何か他に斥候兵の描写がありはしなかつたかと、僕は考へて見るのである」とまで思索を深めている。

敵が登場しない、戦闘シーンがない、男同士の絆だけでもたせる映画となれば、それはそれで軍事プロパガンダではないか、兵士の美化ではないかという批判もあるかもしれない。が、『五人の斥候兵』にはそのような批判に抗しうる、映画言語の強度がある。

この年 8 月に開かれたヴェネツィア国際映画祭にも出品された。岩崎昶と内田岐三雄が現地メディアの反響を紹介している（『キネマ旬報』1938 年 10 月 21 日号）。それによればドイツ『リヒトビルトビューネ』は次のように述べた。「決して反支映画ではなく」「支那については極めて控へ目に語られて居り、支那人は一人も登場しない。観衆はこの明晰な映画に強く把へられた。」また、フランス『プール・ヴー』誌は、「人



国立映画アーカイブ、田坂具隆没後 50 年特集のパフレット

は日本人の魂が、その上に課せられたプロシヤ式軍律主義から脱することを感じる。それ故にいくつかの点に於て、「五人の斥候兵」は我々の総ての注意、驚きと不安とのそれ、に値する」と紹介している。

『五人の斥候兵』は、フランス映画『格子なき牢獄』と並んでヴェネツィア国際映画祭の民衆文化大臣賞を受賞した。

『キネマ旬報』の昭和 13（1938）年度内外優秀映画の日本映画ベスト・テンの第一位を獲得している。